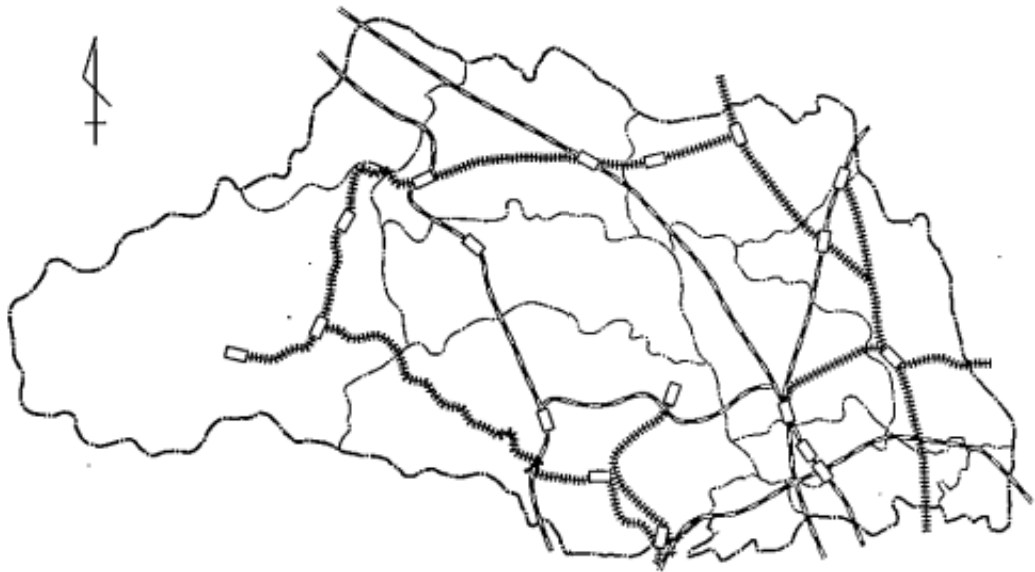


令和7年度

埼玉県英語教員研究発表会

期 日 令和7年8月7日（木）

場 所 行田市中央公民館・教育文化センター
（みらい）



主 催	埼玉県英語教育研究会
後 援	埼玉県教育委員会
	さいたま市教育委員会
	行田市教育委員会

目 次

・ 目 次	P. 1
I 開催要項	P. 2
II 会次第	P. 3
III 全体研修会記録	P. 4
講演 『児童・生徒の学習意欲を高める英語の指導と評価のために』	
講師 文教大学国際学部国際理解学科 教授 阿野 幸一 先生	
IV 分科会記録	
第1分科会	
(1) 『私が授業で大切にしていること』	P. 6
(2) 『英語で自己表現するための力を育むライティング指導』	P. 8
第2分科会	
(1) 『既習事項を総動員して学ぶ授業を通して、 生徒の即興的なやり取りの表現がどのように変容するか』	P. 11
(2) 『「読むこと」における学習者主体の学びの手立ての開発 ＜初級学習者版＞英語を無理なく読める7つのステップ』の効果検証』	P. 13
(3) 『小学校教育からみえた中学校英語教育のありかた』	P. 15
第3分科会	
(1) 『中学校の音読指導にかわる小学校でのアフレコ活動』	P. 18
(2) 『書くことにおいて自己発信能力を高めるには ～各Unitの振り返りとStage Activityを通して～』	P. 20
(3) 『「4技能5領域の繰り返し学習」～ICTと副教材を活用した指導（授業）展開～』	P. 22
第4分科会	
(1) 『未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成』	P. 25
(2) 『自分の言葉で伝える力の向上を目指したコミュニケーション活動の実践』	P. 27

令和7年度 埼玉県英語教員研究発表会の開催について

1 趣 旨 教材の捉え方、指導計画、授業展開、評価等英語教育に関し研究協議等を行うことにより、県下英語科および外国語活動担当教員の指導力の向上に資する。

2 主 題 「21世紀を逞しく生き抜く人材の育成を目指した英語教育

～自分のことばで自分の考えを他者に伝えることのできる児童・生徒の育成～

年々、社会は急速に変化している。新型コロナウイルス感染症の蔓延以後、世界でもグローバル化だけでなくAIの到来やGIGAスクール構想による、一人一台端末の配付など学校の存在価値や意義が見直されることが多くなった。こうした社会において、知識をどう蓄えるかではなく、「既習の知識を他者に合わせてどう使うか」や「自分の意見をどのように他者へと伝達するか」が求められている。子供たちが豊かに逞しく生きるために、主体的かつ協働的に課題解決できる力が求められている。令和10年度からは小学校から段階的に学習指導要領が実施される。引き続き小学校・中学校とも上級学校との連携を一層進めるとともに、上級学校での英語学習の土台作りを行い、学年が上がるごとに英語の学習意欲が向上するよう、英語によるコミュニケーションを行う目的や状況、場面を意識させながらも必要性和楽しさを体得させる指導を計画的に進めることが求められている。

本県研究会においては、学習指導要領における外国語科の目標に照らし、これまでの実践をもとに、児童・生徒一人ひとりが主体的にコミュニケーションを大切にする英語教育を進め、21世紀を逞しく生き抜く人材の育成を目指すために本研究主題を設定した。

3 期 日 令和7年8月7日(木)

4 会 場 行田市中央公民館・教育文化センター(みらい)
(〒361-0032 埼玉県行田市佐間3丁目24-7 TEL: 048-556-2649)

5 主 催 埼玉県英語教育研究会

6 後 援 埼玉県教育委員会 後援承認番号 教 義 指第 303 号(6月4日付け)
さいたま市教育委員会 後援承認番号 教学教指第 1912 号(6月9日付け)
行田市教育委員会 後援承認番号 行 教 指第 751 号(6月12日付け)

7 指導者 北部教育事務所 学力向上推進担当指導主事 岡 真理子
北本市教育委員会 学校教育課副課長兼指導主事 玉神 順哉
久喜市教育委員会 教育部指導主幹兼指導課付 GIGAスクール推進室長 指導主事 田中 佑治
西部教育事務所 学校教育課主幹兼指導主事 山井 葉里子

8 日 程

9:10 9:30 10:00 11:40 12:45 13:00 16:00 16:30

役員 打合せ	受付待機 時間	開会 行事	全体研修会	昼食・ 休憩	受付待機 時間	分科会	閉会 行事
-----------	------------	----------	-------	-----------	------------	-----	----------

9 内 容

(1) 全体研修会 演題 「児童・生徒の学習意欲を高める英語の指導と評価のために」
文教大学国際学部国際理解学科 教授 阿 野 幸 一 先生

(2) 分科会研究協議

分科会	テーマ	提案・発表者
第1分科会	私が授業で大切にしていること	本庄市立藤田小学校 諸橋 由希 先生
	英語で自己表現するための力を育むライティング指導	加須市立昭和中学校 五十嵐 渚紗 先生
第2分科会	既習事項を総動員して学ぶ授業を通して、生徒の即興的なやり取りの表現がどのように変容するかTry Out活動とT-S interactionのサイクルを通してー	日高市立武蔵台小中学校 松元 崇 先生
	「読むこと」における学習者主体の学びの手立ての開発 ＜初級学習者版＞英語を無理なく読める7つのステップ」の効果検証	上尾市立大石南小学校 高橋 博将 先生
	小学校教育からみえた中学校英語教育のありかた	深谷市立花園中学校 北山 航平 先生
第3分科会	中学校の音読指導にかかわる小学校でのアフレコ活動	八潮市立潮止小学校 勝呂 奈緒 先生
	書くことにおいて自己発信能力を高めるには ～各Unitの振り返りとStage Activityを通して～	和光市立第三中学校 八嶋 由紀子 先生
	「4技能5領域の繰り返し学習」 ～ICTと副教材を活用した指導(授業)展開～	小鹿野町立小鹿野中学校 高橋 雄大 先生
第4分科会	未知の状況にも対応できる 思考力・判断力・表現力等の育成	さいたま市立鈴谷小学校 亀井 芽育 先生
	自分の言葉で伝える力の向上を目指した コミュニケーション活動の実践	東松山市立北中学校 小松 里香 先生

会 次 第

<受付待機時間> 9:10～9:30

<開 会 行 事> 9:30～9:50

- | | | |
|---|----------|---------|
| 1 | 開会のことば | 副会長 |
| 2 | あいさつ | 会 長 |
| 3 | 教育長あいさつ | 開催地区教育長 |
| 4 | 指導者紹介 | 副会長 |
| 5 | 日程説明・諸連絡 | 研修部 |

<全 体 研 修> 10:00～11:40

- | | | |
|---|------------------------------|-----|
| 1 | 講師紹介 | 副会長 |
| 2 | 講 演 | |
| | 『児童・生徒の学習意欲を高める英語の指導と評価のために』 | |
| | 文教大学国際学部国際理解学科 教授 阿野 幸一 先生 | |
| 3 | 謝 辞 | 会 長 |
| 4 | 諸 連 絡 | 研修部 |

< 昼 食 ・ 休 憩 > 11:40～12:45

<受付待機時間> 12:45～13:00

<分科会・指導講評> 13:00～16:00

- | | |
|---|---------|
| 1 | 提 案 |
| 2 | 研 究 協 議 |
| 3 | 指 導 講 評 |

< 閉 会 行 事 > 16:00～16:30

講 演

『児童・生徒の学習意欲を高める英語の指導と評価のために』

文教大学国際学部国際理解学科
教授 阿野 幸一 先生

第1分科会

- ・私が授業で大切にしていること

本庄市立藤田小学校 諸橋 由希

- ・英語で自己表現するための力を育むライティング指導

加須市立昭和中学校 五十嵐 渚紗

私が授業で大切にしていること

～帯活動と中間指導の工夫から言語活動の充実をはかる～

本庄市立藤田小学校 諸橋由希

「英語は学ぶものではなく、使うものだ」より一層の言語活動の充実を求めて、私が授業で大切にしている取り組みを紹介する。(1) 非言語的コミュニケーションの重要性の再確認①Smile ②Eye contact ③Clear voice ④Response (2) English shower time の効果的な活用 (3) ALT によるスライド資料を活用した聞き取り (A or B クイズ) (4) 児童の意欲を引き出す中間指導 (5) 魅力的なゴールの設定 (6) All about me book の活用 (7) 横断的な学習 (clil 学習) の取り組みの以上7点である。さらに、児童のテスト結果と言葉から見えてきた成果と課題についてまとめた。

1 はじめに

「楽しくなければ授業じゃない」しかし「楽しいだけでは身につかない」外国語を教えるにあたってのこの大きな課題に取り組み続けてきて13年。外国語専科ではなく、学級担任として外国語を教えることにこだわり、試行錯誤を重ねてきた。その結果「英語は学ぶものではなく、使うものだ。」という考えにたどり着いた。より一層の言語活動の充実を求め、私が授業で大切にしている取り組みを紹介させていただきたい。

2 児童の実態

本校は全校児童82名、全学年単級の小規模校である。本学級の児童15名は、真面目で内向的な性格の児童が多く、自分から積極的なコミュニケーションを図ったり、オーバーリアクションでジェスチャーをしたりすることが苦手である。また、前学年までに学習した英語の知識はあるものの、それを使うことに不慣れな様子であった。

3 研究の実際

(1) 非言語的コミュニケーションの重要性の再確認

「Here We Go!」の冒頭にも掲載されている①Smile ②Eye contact ③Clear voice ④Responseについて最初の授業で改めて説明し、毎時間 small talk を始める前に必ず確認させている。また、日本人の性格・生活・習慣と外国に住む人々との共通点と相違点について学びながら、相手を思いやる行動や英語での表現の仕方、表情についてくり返し話をしてきた。

(2) English shower time の効果的な活用

リズムに合わせて、リアクション時やレスポンスの際に使える短文を覚えるための活動を1ヶ月に10文、1年間に100文で4年間のうち4回繰り返している。また、英語脳に切り替える授業の

導入作業としても効果的である。児童アンケートでも、毎年この活動が好きな児童が多い。さらに、日常生活の実際の場面で使う機会を意図的に設けて、より多くの回数英語を使って身につけられるようにしている。近年、本庄市内のみならず他市よりもこの English shower time を使用したいという依頼が複数寄せられた為、新たに取扱説明書も添付した。



(3) ALT によるスライド資料を活用した聞き取り (A or B クイズ)

異文化理解を図る目的に加え、3分程度のまとまった話を聞き取り理解できているかの確認ができる活動である。1ヶ月に1回程度取り入れている。

(4) 児童の意欲を引き出す中間指導

毎時間授業冒頭に3分間 small talk を行っている。1分間経った段階で児童に、言いたかったけれど言えなかった表現や言葉があるかを確認し、クラス全体で解決案を考えている。直訳の英単語が分からなかった際には、どのような表現で言えば伝わるのかも全体で試行錯誤させている。また、帯活動以外での言語活動でも同様に中間指導を行っている。

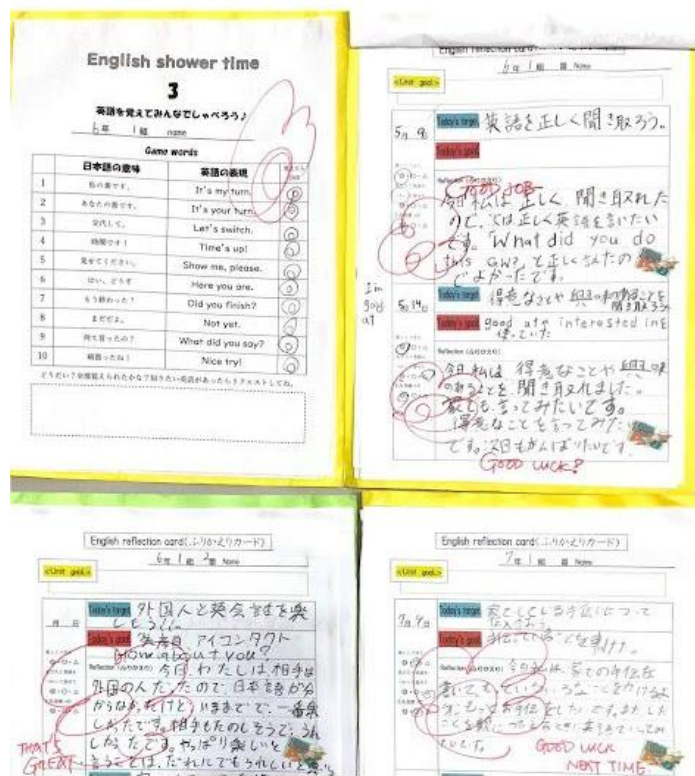
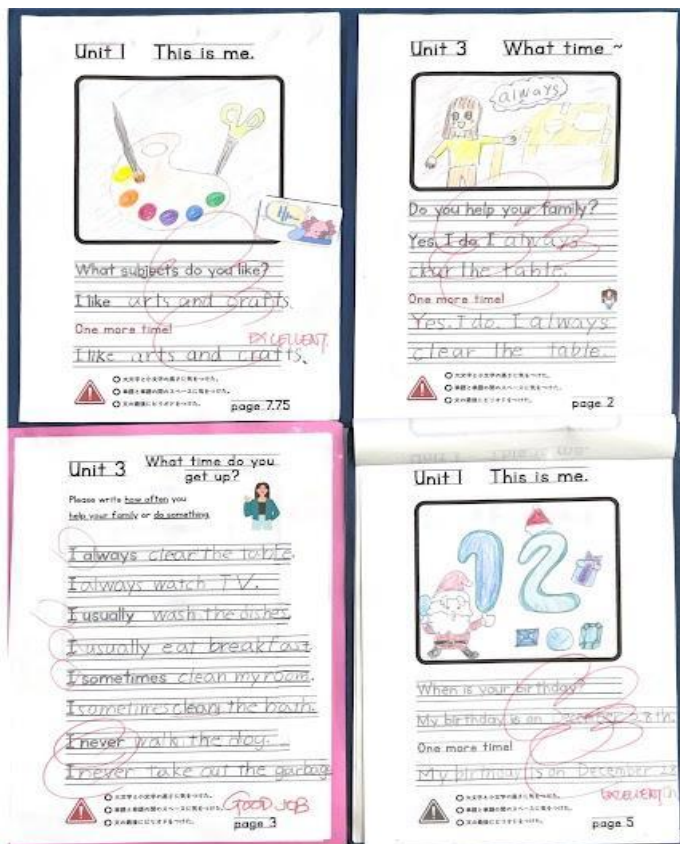
(5) 魅力的なゴールの設定

教科書にあるゴールをそのまま使うのではなく、相手意識・目的・場面・状況が明確であり、かつ本学級の児童に適したゴールを設定するよう工夫している。また、魅力的なゴール名になるように

意識し設けている。

(6) All about me book の活用

書く活動に重点を置いた活動を通年行わせている。自分事の活動になるので、意欲的に取り組めており、特に頻度を表す語句は、より詳しく自分の事を伝えるためには必要だと感じているようである。



(7) 横断的な学習 (clil 学習) の取り組み

全教科の学習において横断的に英語を取り入れることで、英語を聞く回数を増やし、English shower time で学習した短文を実際の場面で使う回数を増やした。

本校を含めて3小学校が1つの中学校に進学するため、特に同じ中学校区での小中連携を深めようと活動している。昨年度は、小学校の外国語主任が中学校の授業参観に、今年度6/25に行った研究授業には、中学校の英語教諭の方々が参観と協議に参加し授業展開への相互理解を深めた。

また6月末に本校教職員を対象とした外国語研修会を行った。昨年度までは、ALT 派遣会社が研修を行っていたが、今年度は外国語主任主導で本校の帯活動の行い方・中間指導・外国語を教える際の教師の心構えについて、意見を交換し合った。

4 成果と課題 (○成果 ●課題)

○1 学期頑張ったことの作文を書かせたところ46%の児童が外国語について取り上げた。児童自身が自分の頑張りを認め、評価し、向上心をもっていることがわかった。

【児童の作文より】※一部抜粋・要約

- ・今思えば、前の私は英語が苦手だと思っただけで、英語に触れていなかった。今、英語にたくさん触れられて楽しくなった。
- ・僕は英語が苦手だったけれど、6年生になって英語をたくさん使っているうちに、英語が楽しくなった。楽しくなったら、英語が好きになった。そして、英語の授業だけでなく他の授業や普段の生活でも、使うようになった。

○1 学期の単元まとめテスト平均 96 点 (知・技) 基本的な英単語を聞き取ったり・読んだりすること、慣れ親しんだ文であれば理解できている。

●1 学期の単元まとめテスト平均 75 点 (思・判・表) 特にまとまった文章を聞きとって、質問に答える際に困難さがみられた。

○6月に行った研究授業では、市内より6名の中学校英語教諭の方々に参加していただいた。8/1には、小中一貫本庄東中学校区合同研修会も行った。

【中学校の先生より】※一部抜粋・要約

- ・1時間の授業内で児童が聞く英語量が非常に多かった。中学校でも、English shower time で身につけてきた短文が出てくる。
- 校内の先生方にも研究授業を参観してもらうとともに、外国語研修を6月末に行い、全教員間で共通認識をもって授業にあたることができている。

「英語で自己表現するための力を育む継続的なライティング指導」

加須市立昭和中学校 五十嵐 渚紗

中学校学習指導要領外国語科（平成 29 年度告示）では、「事実や自分の考えなどを整理し、文と文のつながりなどに注意しながら、まとまりのある文章を書くこと」が求められている。この「まとまり」とは、単に文法的に正しい文章を指すのではなく、一貫性（coherence）と結束性（cohesion）の両方を備えた文章である。一貫性とは、内容や文章の流れが自然である構成を指す。一方、結束性とは、接続詞や指示語、語彙の繰り返しなど、文と文を言語的に結びつける要素である。これらが適切に機能することで、読み手にとって理解しやすく、説得力のある英文となる。

生徒が「まとまりのある文」を書けるようになることは、英語による自己表現力の向上のみならず今後、必要となる思考力・判断力・表現力を育むことに繋がっていくと考える。本研究は、マッピングとハンバーガーライティングの手法を用いて、「まとまりのある文」への指導を2年間にわたり継続的に行った実践の第3回目である。

1 主題設定の理由

筆者は令和 4 年度に長期研修の機会を得て、ライティング指導の効果的な在り方について研究を行った。特にライティング前の準備段階である「プレライティング」に注目し、(ア)やり取り・スピーチ、(イ)マッピング、(ウ)モデルライティングの中で、どの形態が生徒の書く力に好影響を与えるのかを調査した。英文分析と統計処理の結果、やり取り・スピーチが最も効果的であるという結論を導き出した。その際、有意差が認められなかったものの、生徒はやり取り・スピーチと同じくらいマッピングも支持していた。生徒に指示されているものの有意差が認められなかったのはなぜなのか、どうしたらマッピングがライティング指導で効果的になるのかを明らかにするためにさらに調査した。

実践授業①では、マッピング後すぐにライティングするのではなく、スモールトークや友達フィードバックなどを通して、インプットとアウトプットを繰り返す活動を工夫した。分析の結果、マッピングは話題を広げる上で有効であるものの、それだけでは「まとまりのある文」にはつながらないことが分かった。

そこで、実践授業②では「話題を広げる」マッピングに加え、「話題を絞り、整理する」活動としてハンバーガーライティングの手法を導入した。これは、英語の作文構造を視覚的に捉える比喻であり、導入・展開・結論の構成をハンバーガーの形で示すことで生徒が自分の英文を見直し、詳しく説明したり、順序を工夫したりするように促すもの

である。その後、生徒の英文を「まとまりのある文」という観点で分析し、アンケートと個別インタビューを実施した結果、話題の展開や相手意識のある表現が増え、英文に深みが生まれた。多くの生徒が一貫性のある文を書けるようになったが、次の課題として「結束性のある文」という観点が見えてきた。

そこで、マッピングとハンバーガーライティングを組み合わせた指導を通して、「まとまりのある英文」に必要な要素として、一貫性と結束性の両面からその効果を実証的に検証し、ライティング指導の新たな可能性を探るため、本テーマを設定した。

2 「まとまりのある文」

中学校学習指導要領外国語科（平成 29 年度告示）では、「事実や自分の考えなどを整理し、文と文のつながりなどに注意しながら、まとまりのある文章を書くこと」が求められている。この「まとまり」とは、単に文法的に正しい文章を指すのではなく、一貫性（coherence）と結束性（cohesion）の両方を備えた文章である。一貫性とは、内容や文章の流れが自然であるような構成を指し、結束性とは、接続詞や指示語、語彙の繰り返しなど、文と文を言語的に結びつける要素である。これらが適切に機能することで、読み手にとって理解しやすく、説得力のある英文となる。

生徒が「自分の考えや思いをまとまりのある文」で書けるようになることは、英語による自己表現力の向上のみならず、今後求められる思考力・判

断力・表現力の育成にも繋がると考える。

3 研究内容

本研究は、所属校の中学3年生36名を対象に実施した。活動の目的・場面・状況は、「ALTの先生に修学旅行での経験や感じたことを、まとまりのある英文で伝える」と設定した。自分の伝えたい話題を広げた後、整理する時間を十分に確保するため、マッピングは前回の授業で行った。その後、以下の活動を段階的に行った。

- (1) マッピングシートを活用して、話題についてスモールトークを行う。
- (2) 話したことや聞いたことをもとに英文を書く。
- (3) ハンバーガーライティングの手法を用いて、内容面・言語面から整理し、スピーチ原稿を作成する。
- (4) 原稿を4人グループで聞き合い、質問や感想を共有する。
- (5) 聞いたことや話したことをもとに、原稿を再推敲する。

これらの活動を通して、生徒が一貫性と結束性のある英文を構築する過程を支援し、その効果を検証した。計画段階では、つなぎ言葉（接続詞など）をどのように生徒に自然に取り入れさせるかが課題となった。そこで、以前導入していたハンバーガーライティングの手法を再構成し、従来の「具材（導入・展開・結論）を並べる」だけでなく、「ソース（つなぎ言葉）」を使って味付けをするという比喻を加えた。生徒には、「今回は、ソースを上手にを使って味付けし、あなたらしいオリジナルの英文を目指そう。」と声をかけ、つなぎ言葉を調味料に例えて指導を行った。この工夫により、生徒は英文の構成だけでなく、文と文のつながりを意識しながら、自分らしい表現を模索する姿が見られた。

4 成果と課題

(1) 研究の成果

授業後、生徒が書いた英文を「まとまりのある文」という観点で分析した。詳細な結果は本発表で述べるが、アンケートでは約50%の生徒が「文章を組み立てる際にマッピングが役立った」と回

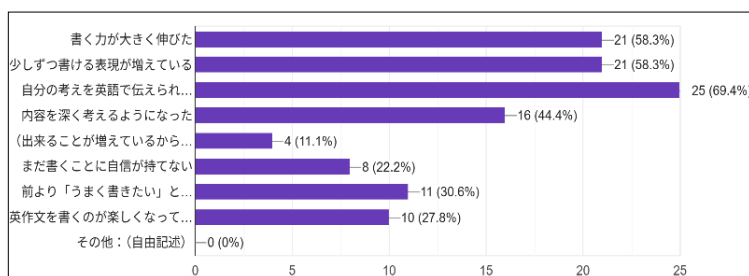
答し、約70%が「自分の考えを英語で伝えられるようになってきた」と答えた。

結束性のある英文を目指すことで、生徒は文と文のつながりを意識するようになり、つなぎ言葉の活用が「こんなことも書ける」という前向きな気持ちに繋がった。それは分量の差こそあれ、友達との学び合いの中で全員が話題を広げ、内容を深めていった様子からも見て取れる。特に英語に苦手意識をもつ生徒が一文でも多く書こうとしていたことは、数値には表れにくいですが、ライティング指導の成果として重要な意味をもつと考えられる。



「つなぎ言葉」を調味料に例えたことで生徒はイメージしやすかったようだ。

去年と比べて、英文を書く力について、どんなことを感じていますか。



(2) 今後の課題

結束性のある英文を目指すためにつなぎ言葉を調味料ととらえる方法は、「イメージがしやすかった」と多くの生徒が答えた一方で、「調味料についてまだ理解できていない。」「英文を作る時に、調味料を上手に使えなかった。」という意見もあった。今後は、普段の授業でもつなぎ言葉に注目して指導していきたい。また、これまでの研究を通して、生徒は自分の考えや気持ちを、一定の分量でまとまりのある英文として表現できるようになってきた。今後は、こうした力をさらに発展させ、論理的な構成を意識したパラグラフライティングにも挑戦していきたい。今後も、実践と研究を重ね、考えや思いを自分の言葉で表現しようとする生徒を育てていきたい。

第2分科会

- ・既習事項を総動員して学ぶ授業を通して、
生徒の即興的なやり取りの表現がどのように変容するか
日高市立武蔵台小中学校 松元 崇
- ・「読むこと」における学習者主体の学びの手立ての開発
＜初級学習者版＞英語を無理なく読める7つのステップ」の効果検証
上尾市立大石南小学校 高橋 博将
- ・小学校教育からみえた中学校英語教育のありかた
深谷市立花園中学校 北山 航平

既習事項を総動員して学ぶ授業を通して、
生徒の即興的なやり取りの表現がどのように変容するか
—Try Out 活動と T-S interaction のサイクルを通して—

埼玉県日高市立武蔵台小中学校 松元 崇

正確さや言語形式への指導に偏った従来の指導を見直し、生徒が既習事項を活用して即興的にやり取りする力の変容を追った。Try Out 活動と T-S interaction を組み合わせたサイクルを毎時間継続することで、流暢さが向上した一方、複雑さや正確さの変化は限定的だった。Try Out 活動の話題設定や複雑さの変容を見守ることが今後の課題であり、短期的な実践や他活動との相互作用も考慮が必要である。

1. はじめに

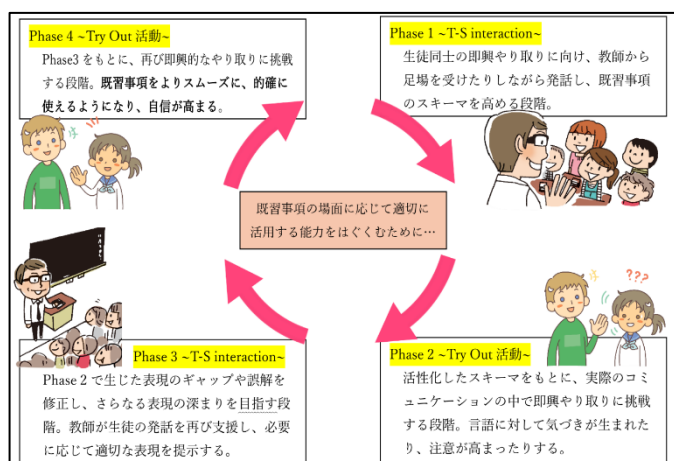
(1) 研究の背景

従来の実践者は、指導の重点が「言語形式に対する指導」に大きく偏っていることが明らかになり、Nation (2007) の提唱するような理想的な指導バランスが保てていないことが明らかになった。そこで、令和 6 年度に、生徒が既習事項を総動員して学ぶ授業を構築する必要性を感じ、指導改善に取り組んだ。

(2) 研究主題

本研究では、令和 6 年度の授業改善の流れを受け、「既習事項を総動員して学ぶ授業を通して、生徒の即興的なやり取りの表現がどのように変容するか」を主題とし、Try Out 活動と T-S interaction のサイクルを通した生徒の言語使用の変容を明らかにする。

《表 1》



2. 研究内容

Try Out 活動とは、場面や状況に応じて即興的なやり取りを行う活動であり、生徒が既習事項を多様な場面で試す機会を提供する（神白・太田, 2021）。T-S interaction とは、生徒全体と教師の口頭やり取りのことを指し、Walsh(2011)は生徒の発話をどのように引き出すかや、どのようなフィードバックを与えるか等に配慮され、効果的に調整されたやり取りが生徒の言語成長を促すと述べている。

これらを組み合わせたサイクル (T-S → Try Out → 再度 T-S → 再度 Try Out) を授業冒頭等に毎時間実施した (表 1 参照)。これにより、生徒は既習事項に繰り返し出会い、それを使って試し、修正する循環を経験する。生徒はその過程で、英語を使って表現を学び、即興的なやり取りの力を高めていくと考えた。本研究では、この Try Out 活動と T-S interaction のサイクルが、生徒の即興的な発話力を高め、既習事項の活用力を促進する有効な手立てとなるかを検証することを目的とした。

3. 研究方法

対象は中学 8 年生 34 名で、従来の授業では Try Out 活動のような自由な発話の機会は設けられていなかった。分析については、Try Out 活動の様子を録画・分析し、5 月と 7 月の同一トピックに基づくペア活動の比較から、流暢さ・統語的複雑さ・語彙

《表 2》

項目	指標	算出方法
流暢さ	1 分間あたりの発話語数	(発話語数 / 発話時間 (秒)) × 60
統語的複雑さ	1 AS-unit あたりの発話語数	発話語数 / AS-unit 数
語彙的複雑さ	Type-Token Ratio	異語数 / 発話語数
正確さ	誤りのない節の割合	(誤りのない節数 / 総節数) × 100

《表 3》

項目	第 1 地点 (5/16)	第 2 地点 (7/10)	増減
流暢さ	41.84	57.58	+15.74
統語的複雑さ	5.32	5.70	+0.38
語彙的複雑さ	0.823	0.819	-0.004
正確さ	74.79%	76.45%	+1.66%

的複雑さ・正確さの 4 観点で変容を検討した (図 2 参照)。この観点は、生徒の発話の変容を見取った藤田 (2017) を参考にしている。

4. 成果と課題

「Try Out と T-S interaction のサイクル」を継続した結果、表 3 の通り、流暢さは約 38%向上した。一方、複雑さに関しては大きな変容は見られなかったが、Skehan (1998) が指摘する「トレードオフ仮説」(流暢さの向上は正確さ・複雑さへの注意を欠くことにつながりやすい) に照らすと、本研究では生徒が正確さや複雑さをある程度維持しながら、間違いを恐れず積極的に発話する姿勢を育んでいたことが示唆される。さらに、研究期間中の Try Out 活動で頻繁に触れた表現 (例: I want to) や、T-S interaction 内で教師が使用した表現 (例: How long) が、生徒の自発的な発話に取り入れられていた場面も確認された。

これらの結果から、教師主導の T-S interaction と生徒同士の Try Out 活動を有機的に結びつけ、毎時間繰り返すことによって、生徒が英語を使いながら表現を学び、やり取りの力を徐々に高めている可能性が明らかとなった。

5. 研究の限界

実践期間が 2 か月弱と短く、変容が一時的である可能性があり、他学年・他校への一般化には限界がある。また、生徒の変容が当該サイクルのみによるものとは完全に断定できず、他の活動 (単元末活動など) との相乗効果の存在も考慮が必要である。

6. 引用文献

- ・ Oliver, R., & Philp, J. (2014). Focus on Oral Interaction. Oxford University Press.
- ・ Skehan, P. (1998). A Cognitive Approach to Language Learning. Oxford University Press.
- ・ Walsh, S. (2011). Exploring Classroom Discourse: Language in Action. Routledge.
- ・ 太田洋・神白哲史 (2021). 『Try Out 活動による「定着」に向かうための文法指導』。『英語教育 7 月号』。大修館書店, 8-9.
- ・ 藤田卓郎 (2017). 英語が苦手な学習者のコミュニケーションを図ろうとする意思と英語運用能力の育成 —『全国英語教育学会紀要 (ARELE)』, 第 28 号, 335-344.

「読むこと」における学習者主体の学びの手立ての開発
～「《初級学習者版》英語を無理なく読める7つのステップ」の効果検証～

上尾市立大石南小学校 高橋 博将

本実践は、初級学習者に求められる読む力とはどのようなものなのか、初級学習者はいかに文字を読むのかという認知プロセスを根底に位置付ける。その上で、学習者が自らの学習状況を把握し、調整しながら学びを進めていく手立て「《初級学習者版》英語を無理なく読める7つのステップ」（*右の二次元コード参照）の開発と、効果の検証を行うことを目指す。尚、初級学習者を、「音と文字の対応規則が十分に構築されていない学習者」と定義づける。



1 研究背景

門田・玉井（2004）によると、熟達した学習者は、音と文字の対応規則が十分に構築されているため、文字情報を視覚で捉えたと同時に音声情報へと変換し、意味内容へとアクセスしている（p.47）。一方、音と文字が十分に対応していない初級学習者は、言語外情報をフル活用し音声を推測し、そこに文字を対応させるという経路をたどっていると考えられる（高橋,2023）。「文字⇒音声」へと変換する熟達した学習者に対し、初級学習者は逆のプロセスをたどっている可能性が高い。

《熟達した学習者》

文字情報 → 変換 → 音声情報 → アクセス → 意味内容

《初級学習者》

音声情報 → アクセス → 意味内容 → 対応 → 文字情報

以上を踏まえて作成したのが、「《初級学習者版》英語を無理なく読める7つのステップ」である。本手立ての詳細については、既述の二次元コードを参照されたい。

2 研究計画

（1）研究の目的と研究課題

以下の研究課題を設定し、「《初級学習者版》英語を無理なく読める7つのステップ」が、「読むこと」の活動場面において、学びの道標として機能しているのかを検証するとともに、本手立てを学習者と共有することで、学習者の粘り強く自己調整を行う姿を見られるのかを検証することを目的とする。

（研究課題①）

「《初級学習者版》英語を無理なく読める7

つのステップ」が、初級学習者の「読むこと」の認知プロセスに則った、段階的な学びの道標となっているのか。

（研究課題②）

「《初級学習者版》英語を無理なく読める7つのステップ」を学習者と共有することで、自らの学習状況を調整しながら学びと向き合う姿を見ることができなのか。

（2）研究計画・実践の流れ

本稿は、令和6年9月に筆者が担任を務める小学5年生（調査参加者：20名）を対象に行った、「《初級学習者版》英語を無理なく読める7つのステップ」を活用した「読むこと」に力点を置いた授業実践である。尚、実践の詳細については、右に掲載している二次元コードから参照されたい。



（3）研究方法

（研究課題①について）

「《初級学習者版》英語を無理なく読める7つのステップ」を活用した「読むこと」に力点を置いた授業実践の後、学習者に各ステップの難易度を5段階から1つ選択させ、ステップを追うごとの難易度の推移を記述統計量から分析していく。

（研究課題②について）

「《初級学習者版》英語を無理なく読める7つのステップ」を活用した「読むこと」の授業実践後に、学習者に振り返りカードの記入を行わせる。その記述内容から、学習者が自らの学習状況を把握し、調整しながら学びと向き合っているか否かを観察していく。

3 結果

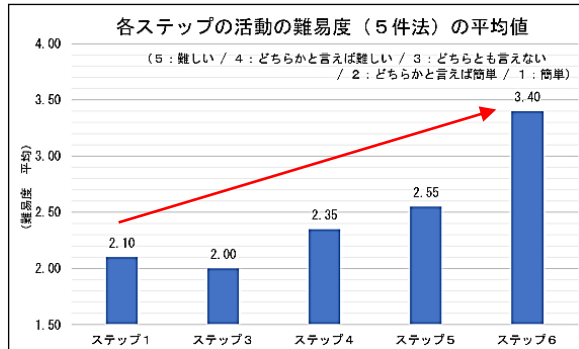
(1) 研究課題①について

図2を概観すると、ステップを追うごとに、活動の難易度が上昇していることがうかがえる。また、中央値や標準偏差(図1)を見ても、各ステップの活動の難易度が段階的に上昇していることが分かる。

《図1 各ステップ難易度調査 記述統計量》

Step	n	平均値 (mean)	中央値 (median)	標準偏差 (SD)
1	20	2.10	1.0	1.33
3	20	2.00	1.0	1.34
4	20	2.35	2.5	1.31
5	20	2.55	3.0	1.36
6	20	3.40	4.0	1.76

《図2 活動の難易度の平均値の推移》



各ステップの個別の分析や解釈に関しては、右の二次元コードから参照されたい。



(2) 研究課題②について

4名の学習者(E~H)が本実践後の振り返りに記述した内容を以下に引用する。

《図9 ステップ3に対する記述(学習者E)》

★英語を「読み・書き」を行う活動で、成長を感じたこと・楽しかったこと・頑張りたいこと
《今日のふり返りの視点: 読むこと・書くこと》
★当てはまるものを1つ選びましょう。
(楽しかった・どちらかと言えば楽しかった・どちらとも言えない・どちらかと言えば楽しかった・楽しかった)
なぞり読みや音読はイラストが無くても、国語分かったので、次は、スラスラテンポ良く読みたいです。

《図10 ステップ4に対する記述(学習者F)》

★英語を「読み・書き」を行う活動で、成長を感じたこと・楽しかったこと・頑張りたいこと
《今日のふり返りの視点: 読むこと・書くこと》
★当てはまるものを1つ選びましょう。
(楽しかった・どちらかと言えば楽しかった・どちらとも言えない・どちらかと言えば楽しかった・楽しかった)
指でなぞって、いっしょにはこうかたんでした。これから分かるようにしました。先生の役に立って音読もできました。なぞり読みや、先生の音声を聞いて音読

《図11 ステップ3に対する記述(学習者G)》

★英語を「読み・書き」を行う活動で、成長を感じたこと・楽しかったこと・頑張りたいこと
《今日のふり返りの視点: 読むこと・書くこと》
★当てはまるものを1つ選びましょう。
(楽しかった・どちらかと言えば楽しかった・どちらとも言えない・どちらかと言えば楽しかった・楽しかった)
なぞり読みや音読はイラストが無くても、国語分かったので、次は、スラスラテンポ良く読みたいです。

《図12 ステップ3に対する記述(学習者H)》

★英語を「読み・書き」を行う活動で、成長を感じたこと・楽しかったこと・頑張りたいこと
《今日のふり返りの視点: 読むこと・書くこと》
★当てはまるものを1つ選びましょう。
(楽しかった・どちらかと言えば楽しかった・どちらとも言えない・どちらかと言えば楽しかった・楽しかった)
なぞり読みや音読はイラストが無くても、国語分かったので、次は、スラスラテンポ良く読みたいです。

図9~12で引用した記述内容は、同じ時間に書いたものだが、学習者ごとに言及する段階が異なっており、各々の学びの達成度合を考えながら記述したことが推測できる。また、4名の学習者の記述内容を見ても、学びの道標である「《初級学習者版》英語を無理なく読める7つのステップ」を活用しながら、言葉の学びと主体的に関わっている学習者の姿を見ることができたと解釈できる。

4 まとめ

初級学習者の認知プロセスに則った「読むこと」における学習の手立てを作成し、その効果や妥当性を実証するとともに、本手立てが学習者主体の学びの一助となり得る可能性を示唆できたことが本研究の成果である。また、本稿を通して「初級学習者」という文言を用いてきたのは、本実践が小学校段階のみならず、音と文字の対応規則が十分に構築されていない中学校段階の学習者においても、一定の効果があると推測するからである。

【引用・参考文献】

- 文科省(2017)『小学校学習指導要領解説 外国語編』
- 門田修平・玉井健(2004)『決定版 英語シャドーイング』コスモピア
- アレン玉井光江(2010)『小学校英語の教育法 理論と実践』大修館書店
- 竹内理・水本篤(2017)『外国語教育研究ハンドブック 改訂版』松柏社
- 山本玲子・田縁眞弓(2020)『だれでもできる英語の音と文字の指導』三省堂
- 高橋博将(2023)『小学校外国語教育における文字言語の扱い方の再考〜誰一人取り残さない小学校外国語教育実現のために〜』令和4年度埼玉県長期研修報告書
- 高橋博将(2024)『「初級学習者に求められる読む力」につなげる系統的な指導に関する研究』埼玉県連合教育研究会主催 令和6年度研究論文

小学校教育から見た中学校英語教育の在り方

深谷市立花園中学校 北山 航平

小学校と中学校が連携し、継続的な指導が必要であると考えられているが、組織文化の違いや多忙な業務から円滑な連携が実現されないのが現状である。生徒指導の面では年度末や年度当初に小中の情報共有がされている。しかし、学習面では小学校6年間でどのような学習指導をされてきたのかはほとんど共有されない。小中交流事業で学んだ小学校の学習指導について紹介したい。

1 はじめに

初任から5年間中学校で勤務し、令和2年度から令和4年度の3年間、人事交流で小学校に勤務した。その後、中学校に戻り3年目（1年担任→2年担任→3年担任）となる。小学校の担任として全教科を教える中で、発達段階に応じた指導方法、板書計画とノート指導、他教科の指導法などから、多角的に中学校英語教育の在り方を考え直すきっかけとなった。

初等中等教育分科会の資料「小・中学校間の連携・接続に関する現状、課題認識」において小学校1年生～3年生の児童は「教科や活動の好き嫌い」について肯定的な回答をするが、小学校4年生から肯定的な回答が減り、中学校1年生から学習的な悩みから不登校生徒数が大幅に増加すると書かれている。小学校低中学年の指導には、子どもの学びを刺激する指導方法があると考え。また、中学校1年生で多くの生徒が学習的な悩みを抱えるのは、中学校での学習指導には多角的に考えなくてはいけない改善点があるのではないかと感じた。そこで、小学校での勤務前後で指導に関する考え方や指導方法を変えた点について、指導実践として紹介したい。

2 実践内容の紹介

(1)板書計画について

小学校で勤務する前は、スクリーンに映したプレゼンテーションスライドと学習プリントで授業を進めていた。黒板を使うことはほとん

どなく、ノート指導や学習の振り返りをさせることもなかった。

小学校では、板書計画とノート指導を丁寧にやっている。板書は「授業の流れや子どもの思考を視覚化すること」、ノート指導は「学習内容の理解を深め、記憶の定着を促すこと」に効果的である。現在、板書計画では以下のことに留意して取り組んでいる。

1つ目は「レイアウトの工夫」である。黒板に書く文字の大きさは、10～15cm四方で書くようにしている。この大きさは、どの座席からも快適に見える大きさとされている。また、思考の流れがつかめるように番号をつけたり、矢印を使い関係性を表したり、吹き出しの中にポイントを書いたりすることで、キーセンテンスの理解を深める工夫をしている。その際、できるだけ多色を避け、説明する言葉を減らし、黒板が生徒の思考の障害にならないように配慮している。

2つ目は、「消さない板書」である。左上に学習の課題を書くこと、生徒の考えを残すこと、生徒へのフィードバックを残すことなど、1枚の黒板で、その1時間の授業の学びが完結するようにしている。

(2)ノート指導について

ノートは「個の学びの足跡」である。黒板に書いてあることを写すだけの活動にはしてはいけなく考える。そこで、ノート指導では「振り返り」を書くことを大切にしている。授業の

最後に 5 分程度時間をとり、学んだことをだれかに教えるように振り返りを書かせる。また、振り返りを書く時には何も見ずに授業の内容、自分の発話した英文、友人に発言を思い出すように書かせている。思い出そうする行為には、記憶が定着する効果があるとされているからである。

(3)算数の指導法

算数では「単位量当たりの大きさ」「割合」「比例」など児童がつまずきやすい単元は次の学年でも、難易度を少し上げ繰り返し学習する。中学校英語でも、教科書の本文に計画的に既習の文法や単語が出てくる。新出の文法だけに触れるのではなく、既習の文法や単語にも触れている。

(4)国語の指導法

小学校 1 年生では国語の授業で平仮名の読み書き、日本語の発音、音節と文字の関係、身近なことについて伝え合いなどを指導する。中学校 1 年生では初めて英語を学問として学ぶため、小学校の国語から学ぶことはとても多かった。小学校 1 年生の国語の学習活動では、「挿絵を見て想像したことを話す」「あいうえおのうたをいろいろな方法で音読する」「口形、発声、リズム等に気をつける」「体を動かしたり、手足でリズムをとったりして読む」「主語や述語に注意し、「一が一。」の文型であることに気づく」「日付歌、曜日歌を唱える」「おみせやさんごっこをする」などの活動を行っている。中学校では、本文の挿絵を見て自由に英語で話す活動、英語の音節を手拍子で確認する活動、フォニックスや曜日や数字の歌、文型の説明など、小学校 1 年生で行っている活動を取り入れた。

また、小学校では漢字の指導では、ドリル学習を日々行い、定期的に漢字小テストを実施し、学期末の漢字テストを行っている。英語の語彙

指導として、毎授業に 10 問の単語テストを同じ内容で 4 回実施している。そして、学期末には 50 問テストを実施し、満点を取るまで繰り返し補習を行っている。

3 実践の成果

本校 3 年生 6 月 8973 名の生徒が受験した実力テストでは、偏差値平均 51 であった。1 年 9 月偏差値 50、1 年 2 月偏差値 53、2 年 9 月偏差値 52、2 年 2 月偏差値 52 という推移であった。英問英答、適語補充（動詞、月名）、適文補充が全体平均よりも 10 ポイント以上上回った。適語補充（名詞）が全体平均よりも 11 ポイント下回った。

また、授業に関する学校アンケートでは、以下のような結果であった。

英語の授業に積極的に参加しているか。	
あてはまる	64 人
どちらかといえばあてはまる	36 人
どちらかといえばあてはまらない	9 人
あてはまらない	6 人

4 今後の課題

実践の成果から、小学校から中学校にあがり、87%の生徒が積極的に授業に参加することができた。1 年生の授業から英語の学習に苦手意識を持っている生徒もいるので、個別支援を行っていききたい。また、今回の実力テストでは“club”という単語を書けない生徒が 64%もいた。既習事項の復習も丁寧に行っていきたい。今後も小学校での学習指導についての知見を深め、英語教育に生かしていきたい。

第 3 分科会

- ・ 中学校の音読指導にかわる小学校でのアフレコ活動

八潮市立潮止小学校 勝呂 奈緒

- ・ 書くことにおいて自己発信能力を高めるには
～各 Unit の振り返りと Stage Activity を通して～

和光市立第三中学校 八嶋 由紀子

- ・ 「4 技能 5 領域の繰り返し学習」
～ICT と副教材を活用した指導（授業）展開～

小鹿野町立小鹿野中学校 高橋 雄大

中学校の多くの授業では音と文字をつなげ、表現の定着および意味理解を目的としたインプットのための音読指導が行われている。音読の効果は多くの研究結果に示されているが、小学校で使用する教科書には文字で書かれた「本文」がなく、音読活動を取り入れることが難しい。そこで音読に代わる活動として『アフレコ』を行うことで、児童は自然とシャドーイングを繰り返し、その結果音読と同じような効果が得られるのではないかと考えた。

1. テーマ設定の理由

5年生を対象にとったアンケートでは“授業で英語を言う時は勇気がいる”と答えた児童は「よくある・いつもある」が42%、「時々ある」を合わせると75%であった。“英語で話すことは難しい”“覚えられない”などの理由を挙げていたが、児童が自信を持って話せないのには何が不足しているのだろうか。小学校の授業は「聞く・話す」が中心だが、『聞くこと』がすぐに『話すこと』に結びつくのだろうか。これらをつなぐ活動が必要なのではないか。中学校ではアウトプットの前に様々な方法で「音読」を行うことが多い。しかし文字で書かれた本文がない小学校の教科書では音読をとりいれることは難しい。そこで音読の代わりにシャドーイングを繰り返す方法として教科書のストーリーを題材に『アフレコ』をすることにした。

音読およびシャドーイングの効果として「学習内容の記憶・定着」（プラクティス効果）、「スピーキング力の向上」（アウトプット効果）、「学習状況の把握と調整」（モニタリング効果）が挙げられる。新たに覚えた単語、構文、文法などを実際に使いこなすためには自動性を身に付ける必要があり、繰り返し声に出すことによって自然と英語を習得することができるプラクティス効果はとても重要である。さらに普通に音読トレーニングをするよりも、内容を自分が話しているかのようにする「なりきり音読」はスピーキング能力の向上に確実に貢献すると言う（門田,2020）。これらの先行研究から小学校外国語教科書のストーリーに登場するキャラクターになりきり発声する『アフレコ』をインプット（リスニング）とアウトプット（スピーキング）をつな

ぐ活動と位置づけ、(1)アフレコ活動が児童のアウトプット（スピーキング力）の質にどのような影響をもたらすか、(2)アフレコ活動をすることで児童のスピーキングに対する不安を軽減することができるのか、を検証することとした。

2. 実践内容

小学校5年生3クラス約90名を対象に行った。New Horizon Elementary5（東京書籍）Unit2の一場面を取り上げ、毎時間5分程度キャラクターのセリフを言う練習を帯学習として取り入れた。最初にゴールの姿を全員で確認した後、全体で意味内容確認、イヤフォンを利用して個人でリスニングと発音練習、分担を決め3人グループで役割練習、デジタル教科書やALTの後に続いてリピーティング練習、音声に合わせてシャドーイング、速度を変えてシャドーイング、モデルの音なしで話すアフレコ、ジェスチャーや実物などをみせながらロールプレイのように練習をした後、最後にアフレコを録画し自分達のパフォーマンスの振り返りを行った。

【アフレコ内容】

Lucus: When is your birthday?

Daichi: My birthday is June 19th.

Lucus: What do you want for your birthday?

Daichi: I want a new tablet.

Lucus: A tablet? I want a cool pencil case for my birthday.

Saki: Lucas! We want a present for Sophia.

Lucus: Sorry, you're right.

Saki: Look! *下線部の文は会話活動の内容
 Lucus: What is it?
 Saki: It's a rugby sticker.
 It's perfect for Sophia.
 Lucus/Daichi: Perfect!!

アフレコ終了後はスピーキングテストを実施した。ストーリーに登場するエレン先生からの質問に答える設定にし、各質問の後に 7 秒間のポーズがある動画を観ながら質問に答える様子を録画し提出する方法をとった。

【スピーキングテスト】

- (1) Hello, my name is Ellen. What's your name?
- (2) OK. How do you spell your name?
- (3) Oh, I see. What subject do you like?
- (4) Really? Me, too. When is your birthday?
- (5) What do you want for your birthday?
- (6) Thank you. Do you have any questions?
- (7) Nice talking to you. See you.

3. 成果

【スピーキングの質】

スピーキングの質を分析するにあたり、文で解答 (I want a new tablet.) 単語で解答 (tablet) 誤答・無解答の 3 段階に分けた。テストのうち (4) (5) が Unit2 アフレコに該当する。結果は (4) 文: 72%、単語: 18%、誤答・無解答: 10% (5) 文: 50%、単語: 29%、誤答・無解答: 21% だった。この数値の高低については比較するものがないので判断しかねるが、特に単語ではなく文で答えるよう指示はしていない中、一定数の児童が文で正確に答えられていたことは高く評価したい。

【情意面】

テスト終了後アンケートでは「良くてきた・まあまあできてきた」60%「あまりできなかった」30%「ほとんどできなかった」10% だった。良くてきた理由として「だいち、ルーカスのせりふを思い出してやった」「アフレコのとくにセリフを覚えたりして慣れたから」「Unit2 の文が

でてきたからうまくできた」「アフレコでやったことがそのままできてきたから」などアフレコ練習がスピーキングテストの結果に結びついたと考える児童が複数いた。またテストや話す不安についての直接的な質問ではないが、「アフレコにまた挑戦したいか」という問いに対し「そう思う・ややそう思う」と回答した児童は 81% で、「アフレコが成功して自分がこんなに英語ができることを知った」「英語は細かく聞けば理解でき、簡単にできて分かって好きになっていくと知った」と記述した児童もあり、英語を話すことに対する不安は多少軽減されたのではないかと思う。

4. 課題

アフレコでは明確に場面や状況が示されているが故に、ある場面で使用された表現が他の場面でも使えることに意識が及ばず、その結果スピーキング内容の幅を狭めてしまう可能性があるのではないだろうか。また音読に比べアフレコが上手くいったことで満足をしてしまう傾向にあるように感じた。この活動はゴールではなく、自己表現につなげる中間地点であることを児童と共有したい。「声優を目指しているわけではない」「セリフを言えると何が良いのかわからない」などアフレコを通して身に付けた知識が実際に活用に関わりついていないことが原因だと考えられる記述もみられた。アフレコでのインプット知識がアウトプットの際に『使える』ということを実感できるような指導の工夫が必要である。

最後に「聞く」と「話す」をつなぐ活動がアフレコである必要性についても、今後検証をしなければならない。インプット活動としては他にチャンツ、歌、会話練習などアフレコ以外にも様々なものが考えられる。アフレコの代わりに会話練習をしたクラスとのスピーキングテストの結果を比較すると、前述の (4) の文での解答はアフレコ練習クラス 72% に対し会話練習クラスは 24%、単語での解答がアフレコ 18%、会話 60% だった。これらの結果をふまえ、インプットとアウトプットをつなぐ手段として小学校段階の児童に有効な活動は何かを模索し続けたい。

書くことにおいて、自己発信能力を高めるには ～各 Unit の振り返りと Stage activity を通して～

和光市立第三中学校 八嶋 由紀子

本学年の生徒は、1 学年時から英語を書くことへの苦手意識が強く、なかなか生徒たちが思い描くような達成度にならなかった。その中で大事にしてきたことは、①何を目的に書くのか②自分事としてとらえられているか③自分の伝えたい事が表現できているかの 3 つだ。自分の考えを書かせる活動を増やすことで、苦手よりも表現したいを先に感じさせ、書くことへのアレルギーを軽減できないか、実践してきた。自身の授業の流れと共にその内容をまとめた。

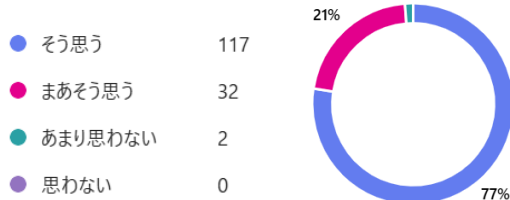
1. テーマ設定の理由

本校の生徒（中 3）は、「書くこと」において苦手意識が強く定期テストの英問英答の問題や条件作文などをはじめ、自己表現の一環であるポスターセッションやパワーポイントのスライド発表など、自信が持てない生徒が多い。英語を言語・ツールとしていかに自己発信できるか、単元を通してどのように授業を進めていくかを考えた。

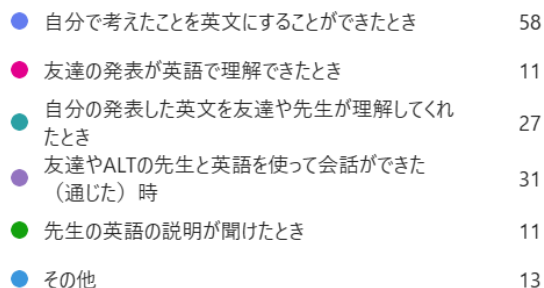
2. 研究の実際

生徒の実情を知るために、アンケートを実施した。項目と結果は以下の通りである。

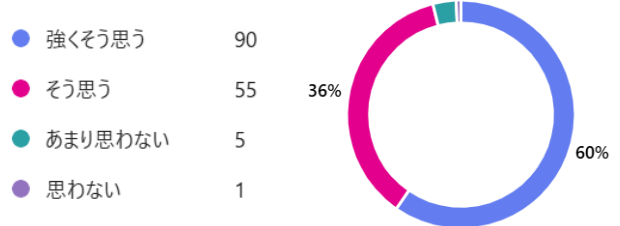
（1）英語は将来役に立つと思いますか。



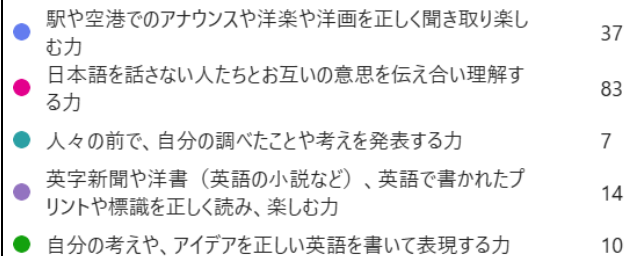
（2）あなたが英語を使っていて、「できた！」「うれしい！」と思ったのは次のうちどれですか。



（3）英語が使えるようになりたいと思います



（4）次の力のうち、どの力を最も身につけたいか



（5）英語ができるようになったら何を楽しまたいですか

・外国人の友達を作りたい・映画などを字幕なしで楽しみたい・海外で働きたい・海外の人と話したい・海外の人に日本を案内したい・本場のダンスを英語で学びたい・海外で英語を使って野球を学びたい・海外に住みたい・異文化を学びたい。

設問（2）の答えとして、「自分の考えたことを英文にすることができたとき」を選んだ生徒が全体の 38% を占めた。「書くこと」で自己発信をしていきたいフェーズに入ってきた生徒たちが、意欲を失わずに、いかに取り組めるかを考えながら授業を組み立てた。

本校は、New Horizon（東京書籍）を使用している。各 Unit が 4 セクションで構成されており、1 セクションで新しい文法事項を 1 つ学ぶ。文法の定着と自己発信能力を高める目標を達成する

ために、“Evaluation Sheet”を書かせている。Part1,2,Read and think1,2 では、習った文法を使用し、自分の考えた文章や対話を書き、単元の最後に、Point of view として単元を貫く問いに英語で答えさせ、思考力・判断力・表現力を磨きながら自己発信能力の育成を図ってきた。

たとえば、Unit1 “What is special about Japanese pop culture?”においては、以下のような生徒は以下のような考えを発信している。

I think anime is an important Japanese culture. Because anime has a deep connection with foreigners. I often see foreigners cosplaying. They seem so happy that they make me happy. Animation has a positive effect on cosplay, music and many other things. I heard that Japanese and foreigners often get along well by talking about anime. I think it's good to be able to make friends with other countries through animation.

I think we Japanese need to cherish and inherit anime. I think it would be good to convey traditional culture and living culture overseas through animation.

I think that Japanese anime is special about Japanese pop culture. Because Japanese anime is popular all over the world. My friend likes "My hero academia" very much. I have seen it many times. It's very exciting. So I think that foreigners will like "My hero academia". I recommend anime is "Blue box". It's sports & love story. Please read it! That is why I think that Japanese anime is special about Japanese pop culture.

一人一台タブレット端末を使うことによって、英語だけでなく、内容についても調べられることで、「書きたい!」という意欲が高まったように思う。また、教科書にある Stage Activity を通して、「書くこと」+「話すこと（発表）」をすることで、達成感を味わえるよう実践してきた。

今回は、Discover Japan! Let's introduce Japanese culture.というテーマで4人グループの活動を行った。和光市に在住の外国人の皆さんに日本の良さを伝えると共に、自分たちも再発見してみよう、というのが目標だ。京都奈良への修学旅行もあり、諸活動と絡めながら教科横断的な活動になる Stage activity は生徒たちの楽しい活動でもあるようだ。



今回はパワーポイントでの作成だったが、ポスターの作成や冊子の作成など生徒の関心意欲を高めるための工夫をしている。

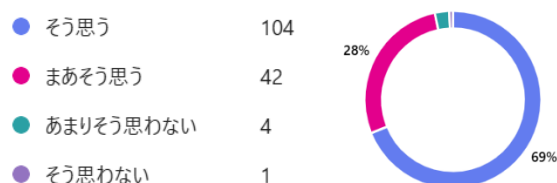


(2年時のポスターセッション travel around the world!)

3. 今後の課題

書きたい意欲もあり、実践的な活動にも取り組んでいるが、正しい英語で書くことに自信を持ってない生徒が多い。意欲を削がずに、自己表現ができるよう、4技能5領域のバランスのよい活動が大事だと実感した。

アンケートの最後の設問「英語ができると、人生が豊かになると思いますか。」には以下のような回答だった。受験の科目だから仕方なく勉強するのではなく、一つの道具として学べるよう、今後も授業を展開していきたい。



『4技能（5領域）の繰り返し学習』

～ICTと副教材を活用した指導（授業）展開～

小鹿野町立小鹿野中学校 高橋 雄大

「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善において、コミュニケーション能力を重視し、4技能5領域の目標の実現に向けてそれぞれをバランス良く指導することが求められている。また、「ICT教育」の充実や「働き方改革」の推進が叫ばれている。

これらに柔軟に対応し、4技能5領域の確かな学力を育成するために、副教材も活用しながらの繰り返し学習に焦点を当て、今回の研究発表に臨みたい。

1 はじめに

英語学習の基本は4技能5領域の目標の実現に向けてそれぞれをバランス良く教えることであると考えている。もちろん、バランスを意識して指導をしているのだが、どうしても偏りが出てしまう。また、定着に差が生じたり、たとえバランス良く指導や学習ができたとしても、結果的に理解が不十分だったりすることもある。

そこで、4技能5領域の力を向上、定着させるために、各領域の活動をパターン化、固定化し、繰り返し学習する反復練習が必要なのではないかと考えた。

また、各活動の充実を図る一助として、デジタル教科書やタブレットなどのICTを積極的に活用するようにした。さらに、働き方改革の観点から、副教材や書籍などを多用した教材研究、授業展開も意識した。

2 研究の実際

（1）単語テスト

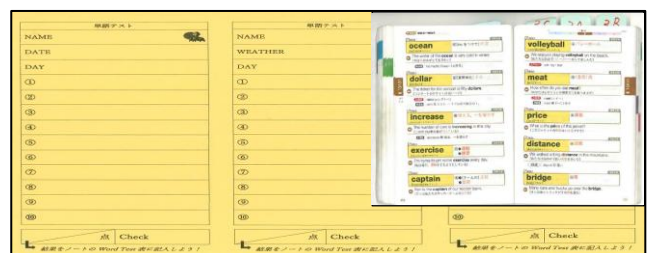
週2回、授業の最初に実施する。教材は、資料Ⅰを使用している。範囲は2ページとし、10問出題する形を取っている。大型モニターに映し出したり、フォームを活用したり、ICTも効果的に導入している。終了後、様々なペアで交換し、採点をし合っている。

3年間実施を継続しているが、休み時間中に単語の勉強、暗記などに励む生徒が徐々に増えていった。今では多くの生徒が事前学習に取り組み、単語テストに臨んでいる。そのため、点数も上がっている傾向にある。長期休み明けには、確認の意味を込めて100問

テストも実施している。

単語は英語学習の基本であり、知っていて損はない。長文問題では、単語を手がかりに意味・内容をある程度想像できたり、会話についても単語の使用だけで意思伝達したりすることは可能である。つまり知っていればいほど、解ける問題が増えたり、単語だけでも通じるといった機会も増えたりする。言えるならば、4技能5領域の基本にもなる。

資料Ⅰ（Ⅰ（旺文社：「高校入試でる順ターゲット 中学英単語1800 四訂版」↓）



（2）英会話（発話）

①ALTのSmall Talk

今年度はALTが週3回授業に参加している。その際、授業の最初に毎回Small Talkを実施する。教材はALTが用意している。4技能5領域に対応するよう依頼している。

資料Ⅲ右（浜島書店：「Step Up Talking 3」↓）



資料Ⅱ左（ALT作成↑）



②副教材の活用

毎週金曜日を「Talking & Writing Day」と設定し、ALTと一緒に話すことと書くことに特化して授業を展開している。教材は資料Ⅲを使用している。

①②の取組で重視しているのが、型を与え、パターン化するということである。その上で、読み込む練習とやり取りを積んでいる。そして最後に、他にも利用できる類似表現を提示し、さらに練習に励む。こうしたプロセスを毎回踏み、繰り返しを徹底することで安心して活動に取り組み、会話表現の幅を広げている。そして、発表やスピーキングテストなどのパフォーマンステストで評価をしていく。

(3) 英作文

(2)の②同様、毎週金曜日を「Talking & Writing Day」と設定し、ALTと作文指導にも力を入れている。教材は資料Ⅳを使用している。

例文やモデル文がきちんと整っていて、書き方の型やヒントを与えてくれるので、学力差に応じた個別最適な学びも実現できる。

添削は主にALTがおこなっている。添削された作文をしっかり見直し、もう一度書き起こす時間も取り、定期テストやパフォーマンステストにもつなげるようにしている。

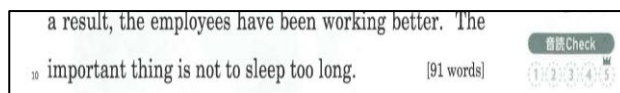
資料Ⅳ（浜島書店：「さくさく Writing 3」）



(4) 音読

教科書の本文内容確認や会話練習の基礎を築くことも見据えて音読に取り組んでいる。

方法としては、デジタル教科書などのICT機器を用いた「Shadowing」を最重要視している。個人練習、ペア練習(男女、ランダム)、グループ練習、ALTとの練習に加え、速度を変えるなどしてバリエーションを持たせている。(教科書SUNSHINE音読Check欄↓)



(5) 文法確認テスト

4技能5領域の育成のために、文法指導も避けては通れない。文法力がないと、正しく書いたり、話したりできない。その結果、定期テストや入試などの各種テストで減点や失点することがある。

文法も繰り返し学習しないとなかなか定着しない。そのため、週2回、授業の最初に文法確認テストの時間を設けている。

教材は資料Ⅴを使用している。短時間で実施し、ペアで採点し、点数をフォームで送信している。

資料Ⅴ（正進社：「英語の重点ドリル3」）



(複製不可)

3 成果

- 3年間単語テストを継続しているので、点数が上がり、取り組む意識が高まった。
- 言語活動をパターン化、固定化し、繰り返し実施しているので、安心して活動でき、定着につながった。
- 副教材やICTを活用することで、教材研究などの時間が短縮された。

4 課題

- △デジタル教科書の生徒用の活用が少ない。
- △学力差や二極化への対応が不十分である。
- △ALTを活躍させられない時がある。

第4分科会

- ・ 未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成

さいたま市立鈴谷小学校 亀井 芽育

- ・ 自分の言葉で伝える力の向上を目指した

コミュニケーション活動の実践

東松山市立北中学校 小松 里香

未知の状況にも対応できる
「思考力・判断力・表現力等」の育成

さいたま市立鈴谷小学校 亀井 芽育

児童の「思考力・判断力・表現力等」を育成するために主に5つの手立てを立て、実践した。

①単元目標の設定の工夫、②知識・技能を定着させる活動の実践、③ICTの活用、④相手の反応に合わせて答える活動の実践、⑤ルーブリックの活用、である。児童が思考力を働かせながら活動をする場面が見られた一方、より思考力を高められるような活動を設定することが次への課題ということも

1. 研究テーマについて

AIや自動翻訳機の進歩により外国語を学ばなくても他の国の人々と繋がる時代になってきている。そのような状況の中で、自分の習得した知識や表現を使い、自分の考えを表現できる能力を育んでいきたいと思い研究テーマとして設定した。「未知の状況にも対応できる『思考力・判断力・表現力等』の育成」とは学習指導要領(外国語)の第1章で書かれている文言である。予測不可能な社会の変化に対応し幸福な人生を歩んでいける力、つまり「生きる力」を身に着けるために必要な資質の1つと捉えられている。外国語の知識・技能だけではなく、それを生かす体験を積み重ねることにより未知の状況に対応できる力を育てたい。

本研究では学習した語彙や表現を使って自分の考えを使いたくなるような、思考力を育む手立てを設定した。また、児童が思いを幅広く表現できるようにするために、知識・技能を定着させる活動も手立てとして入れた。

2. 実践について

(1) 研究対象及び実践単元

- ① さいたま市立大久保東小学校 5年生
- ② 実践単元

Unit8 Let's go to Singapore. (啓林館)

世界の国について関心をもち、行きたい場所ややりたいこと、できることを伝える英語表現を学習する。

- ③ 使用学習ソフト

学習支援ソフト「ミライシード」内 オクリンク+

(2) 指導計画・言語材料

- | |
|---|
| 1 行きたい国を尋ねたり答えたりできるようにしよう
Where do you want to go? I want to go to (国名). |
|---|

- | |
|---|
| 2 行きたい国でやりたいことを伝えられるようになるよう
I want to go to/see/play/eat/enjoy ____. |
|---|

- | |
|---|
| 3 行きたい国に友達を誘えるようになるよう
Let's go to (国名).
We can go to/see/play/eat/enjoy ____. |
|---|

- | |
|--------------------------------------|
| 4 友達が自分の提案する国に行きたいと思えるような
誘い方をしよう |
|--------------------------------------|

- | |
|-----------------------------|
| 5 行きたい国について調べ、オクリンクのカードを作ろう |
|-----------------------------|

- | |
|------------------------------|
| 6 行きたい国について調べたことを元に、原稿を作成しよう |
|------------------------------|

- | |
|----------------|
| 7 発表に向けて練習をしよう |
|----------------|

- | |
|---------------------|
| 8 クラス旅行で行きたい国を発表しよう |
|---------------------|

Hello. I want to go to Spain.

Because I want to see Sagrada Familia.

Look! We can see stained glasses. It's beautiful.

Let's go to Spain!

第1時～第3時は新出表現を学ぶ時間(知識・技能)、第4時～第8時は学習した表現を生かし自分の考えを伝える時間(思考・判断・表現)という単元構成にした。

(3) 手立て

手立て1 「やってみよう」単元目標

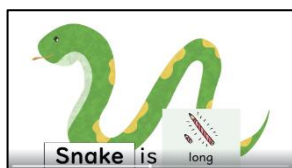
「20歳になったときにクラスで行く旅行先を発表で決めよう」を単元目標に設定をした。児童はグループで1つの国を担当し、その国でできることや自分がやってみようこと発表をする。発表後、行ってみたいと思った国に投票をし、一番票の多く集まった国が旅行先になる、とした。自分の国が採用されるためには、その国でできることややりたいことを言うだけでなく、観光地の様子や特産物の味を伝えるなど詳しく述べるための知識や技能を身に付け、表現をする必要がある。実際に自分たちが大人になったときに行く(かもしれない)旅行先というテーマにすることで、自分の国が選ばれるよう具

体的な情報を英語で伝えようとする姿勢が多くみられた。



手立て2 語彙を増やす活動（知識・技能）

帯活動として、味や様子を表す語彙をインプットする活動(Word Time)を行った。教科書の巻末にある Word List や付属の Jingle を参考に3分程度の動画を作成した。動画の英語を聞いて発話する活動を授業の最初に設定した。Word Time 内でインプットした表現を言語活動や発表で使う児童が多くみられた。



手立て3 ICTの活用

オクリンク+の機能を使い、カードをつなぎ合わせて文を作成するようにした。授業内で学習した定型文のカードに単語を組み合わせることで簡単に文章が作成できる。また、共有 Box 内に今まで学んできた語彙カードを入れておくことで、児童が必要に応じて取り出し、使用できるようにした。カードにしておくことで、英語が苦手な児童でも文章を容易に作ることができた。また、今までに学習してきた表現もカードになっており、学んだことを再度生かすことができた。



手立て4 相手の反応に合わせる活動の実践

相手意識を持たせ実際の会話のような即興性を持たせるために、授業の中で Plus 1 と Reaction を行うよう指導した。Plus 1 とは、自分が用意した文や原稿にプラスで1文付け加えることである。I like....や Do you like...? など、小学校低学年の時から慣れ親しんだ表現をプラスするように指導した。

また、Reaction とは相手の話の内容に応じてリアクションをすることである。とても綺麗な景

色を紹介された場合は Great! や Wow. と応じ、Do you like strawberries? の返答に No. と言われたら、Really? や Why? とリアクションをするなど、より自然な英語の会話が行われるよう指導した。自分がどれくらい Plus 1 や Reaction ができたかは、ふり返りで◎○△で自己評価した。

Plus 1 と Reaction を意識することで、発表時に Do you like ...? を取り入れ、聴衆の反応に合わせてリアクションをする児童の姿も見られた。事前に用意した発表原稿ではない、即興性のある英語を使うことができた。

手立て5 ルーブリックの活用

ルーブリックを活用したふり返りを行った。児童が学習の内容に慣れてきた第3時以降は児童の意見を聞いて SS や SSS など設定した。ルーブリックを設定することで目標がより明確になり、次の時間に S になるにはどうしたらよいかなど、学習の見通しを持てる児童が増えた。

1時間目のルーブリック
目標：行きたい国を尋ねたり答えたりできるようになる
S + 友達の意見にリアクションをしながら
A 自分の行きたい国をすらすら伝えることができた
友達に行ってみたい国をすらすら尋ねることができた
B 止まることもあるけど、自分の行きたい国を伝えられた

3. 成果と課題

(1) 成果

「20歳になったときにみんなで行く旅行先」というテーマを設定することにより、どのように伝えたらクラスの票を集めることができるのかを真剣に考える児童の姿が見られた。目的・場面・状況を具体的に設定することの重要性が分かる実践となった。

(2) 課題

より思考力を高めるには、聞き手に合わせたプレゼンテーションをできるようにすることが今後の課題であると感じた。例えば、相手に辛いものが好きかどうか尋ね、好きであればキムチを紹介し、苦手であればスイーツを紹介する、といったように相手の反応に応じて内容を柔軟に変えられるとより良い。今回の実践では、児童が代案を考える時間的な余裕がなく、十分に取り組むことができなかった。児童がより主体的に思考力を高められるような授業づくりを目指したい。

自分の思いを自分の言葉で伝えることができる生徒を育てるために、既習表現を用いたアウトプットに焦点を当てた帯活動での Small Talk を実践している。T-S interaction で生徒の発話を促し、生徒同士の言語活動を中間指導でサポートしながら、生徒自身に語彙や英語表現の「気づき」を与える工夫をしている。生徒の伝えようとする意欲やつまづきを把握して、やってみる→中間指導→実践を繰り返し、表現の幅やコミュニケーションの質の向上を目指す。

1 はじめに

「自分の思いを自分の言葉で伝えたい」という生徒を増やすために、授業の帯活動で Small Talk の実践を行ってきた。現在は中学2年生を指導している。昨年度は、小学校で学習した既習表現を基盤とし、語彙や文法の正確さよりも伝えようとする姿勢やその時に学習した定型文に焦点を当てた活動を行った。その影響もあり、英語が苦手な生徒の中には、非言語的なジェスチャーや単語のみで懸命に伝えようとする生徒や、伝えたいことはあるが表現できずに時間が過ぎてしまう生徒もいた。そのため、Small Talk の全てのテーマに目的・場面・状況を設定し、ある程度表現を絞ることで発話を促す工夫をした。今年度は中間指導に力を入れ、コミュニケーションの中で生徒が言語の形式や文法構造の正確性を意識し、対話を通して自己表現の幅を広げることを目指す。

2 研究の実際

目的・場面・状況を踏まえた帯活動 (Small Talk) では、相手との対話を継続させるために特に大切にしたいことを生徒と共有している。

Good Reaction + Easy Question

相手の言葉に対して「反応」を返したうえで、何か一つ簡単な質問を必ず加える取り組みである。

- Role-Play (場面の人物になりきって質問や考えを自分の言葉で伝える)

場面 (1) : カナダに住む女の子からビデオレターが届きました。彼女は、あなたが一番好きな日本食について知りたがっています。

(NEW HORIZON 2 English Course

Stage Activity 1 “My Favorite Japanese Food” 引用)

役割 A : カナダに住んでいる女の子

相手に一番好きな日本食を聞いてみよう。

B : あなた 理由を含めて質問に答えよう。

→ALT と JET のデモンストレーション後、生徒同士のやりとりを机間指導。その中で、言語形式や言葉を何度も相手に確認しながら英語を伝えようとしていたペアを指名し、彼らにもう一度対話してもらった。実践→共有→中間指導→実践というように繋げた。

〈Small Talk 1 回目終了後〉

T : S1 and S2, your conversation was good!

Please show us your conversation.

S1, S2 : Hello.

S1 : What is your favorite Japanese food?

S2 : I like ramen.

S1 : Oh, nice! (Good Reaction○)

……. Why?

S2 : (ん～) Because… I like noodle!

S1 : Me, too. I like noodle, too!

(ん～、何味…。What…味、味～? flavor?)

What flavor do you like? … Flavor?

S2 : (うんうん、合ってる) I like miso ramen!

S1 : Good! Good!

【中間指導のポイント】

- ① 接続詞 “Why” “Because”を拾い、理由を尋ねたり答えたりする表現を全体で復習した。
→ “Why?” → “Why do you like ramen?”
“Because ramen is delicious, I like it.” や、
“Because I like noodles, I want to eat ramen.”
- ② “flavor (味)” (2年生で学習済み) を用いて質問ができたこと。“What flavor do you like?”

場面 (2): あなたが家に帰ると、妹のハナが怒っています。なぜ怒っているのか尋ねよう。
(PPT スライドにお母さんがケーキを食べている絵を載せて、場面を想像しながら対話をさせた)
役割 A: あなた B: ハナ

→ALT と JET のデモンストレーション後、生徒同士のやりとりを机間指導。英語が苦手な生徒でも、英単語や表現を相手に教えてもらいながら対話を続けようと頑張っている生徒もいた。

〈Small Talk 1回目 机間指導中にて〉

S3: Hana, why are you… 「怒る」って…?

S4: … angry!!

S3: あ〜! Why are you angry?

S4: Because…, my mother eat my cake!!!

S3: Oh, bad… (残念だね、と言いたいのか?)

S4: I want to eat cake.

S3: OK. I ん〜… 「買う」って “buy” だっけ?

S4: うん。Yes!

S3: I buy cake!

S4: I “will” buy cake for you! (“will”教えてくれた)

S3: あ〜!! I will … buy cake (for you)!

S4: Wow! Really? Thank you!

【中間指導のポイント】

- ①ハナの “I want to eat cake.” という発言を踏まえ「自分が買ってあげるよ!」という発想や、「買う=buy」の確認。
→ (S3) の “I buy a cake.” を (S4) が “I will buy cake for you.” に言い換えてくれたことで、(S3)

は「(あなたに) ケーキを買うよ=これから買いに行く」 “will”は未来形 (意志: これから〜する) とニュアンスだと気づくことができた。

- ② (S4) の “I want to eat cake.” に対する質問を全体で考え、“Do you like cake?” “What’s your favorite cake?” “What kinds of cake do you like?” が挙がった。英語が苦手な生徒にとっては少し難易度が高く思えたが、“Do you〜?”の文であれば、言えている生徒がいた。

- ③ 第4文型(SVOO)を Unit1 で学習した。“I will buy a cake for you.” を書き換えた文の復習も兼ねて確認することができた。“I will buy you a cake.”

3 研究の成果

生徒が想像しやすく、興味を持てるような場面設定をして Small Talk を行うことで、英語を話す必然性を持たせることができた。また、生徒の躓きや表現を中間指導で共有し、コミュニケーションの中で正確な文法構造を意識させながらアウトプットさせることで、ジェスチャーや単語で伝えようとする生徒や、言葉が出なかった生徒も、仲間と協働して単語と単語を繋げたり定型フレーズを使ったりするなど、やりとりの中で互いに教え合う様子も少しずつ見られるようになった。

4 今後の課題

Small Talk で自分が伝えたいことを表現できることは、生徒の学習意欲に繋がる。しかし、英語が苦手に対話を継続させることが困難で達成感を見いだせない生徒も一定数いる。そのため、生徒自身に自分が言えなかった語彙やフレーズをどの程度表現できるようになったのかを認識させ、自身のレベルや達成すべき目標への到達度が明確化されるような、ループリック評価を取り入れたい。「やってみる→中間指導→気づく→実践」を繰り返し、生徒に成長を実感させながら、コミュニケーションの質をさらに高めていきたい。